

ヴィクターの諸変奏

——メアリー・シェリー、『フランケンシュタイン』(1818) と自伝の反復 ——

小林 徹

外国文化研究室

Some Versions of Victor :

Mary Shelley's *Frankenstein* (1818) and Repetition of Autobiography

Toru KOBAYASHI

World Civilizations

Abstract

Why did Victor Frankenstein create the monster? Why did he do such and such after the creation? These are the difficult questions with which many readers of *Frankenstein* have struggled, so their solutions are consequently various. This critical confusion can be attributed to the autobiographic narratives by Victor himself.

In the work he narrates his own past three times. The problem is that those narratives respectively represent different figures of the narrator, which means he has no definite image concerning his "self" or that the self is too fundamentally enigmatic to be understood by himself. This is the reason why each critic has shown different characteristics of "the truth" of the creator.

Also, this characteristic of Victor's narrative has something to do with the contemporary development of autobiographic genre and Mary Shelley, who revised the work in later time. Some Romantics tried to define their own selves repeatedly by writing of his past in vain as was seen in Victor's case. Shelley's revision effectively contributed to maintaining the enigmatic self of Victor because she explained away the creator as led by his own destiny and she did not give readers any more clues to comprehend his behavior which had been depicted in the first edition.

I

人間による創造はもとより、探検、殺人、裁判、冤罪、逃亡と追跡など、数々の出来事が繰り広げられる *Frankenstein* (1818) ではあるが、そこでの基調をなす行為は疑いなく言語的なそれである。作品自体、Robert Walton という英国人探検家による、姉 Mrs. Saville 宛ての手紙または手記という体裁をもつため、読者は設定上彼女とともに彼の書いた記録を読むことを通じてそれらの事柄に立ち会う。加えて登場人物たちもまた、語ることを主な行為としており、そのことは作品の構造に如実に反映されている。ウォルトンは極地にあつて一人の放浪者を救出するが、彼こそ主人公 Victor Frankenstein、monster の創造者であり、彼はウォルトンに創造を含む自分の数奇な半生を語って聞かせ、そしてその語りにはまた、モンスター自身による己の成長過程に関する語り (68-97) が埋め込まれているのだ (Behrendt, "Language" 78-84)。なおこうした入れ子状の語りの構造は大枠のものであり、さらにその内部には、フランケンシュタイン家の召使 Justine Moritz の出自について (39-41) や、モンスターが偶然出会った De Lacey 家の経歴について (82-85) といった、他の登場人物たちに関する語りも少なからずみられる。¹ このように読者は度々、というよりほぼ全編にわたり、文字通り読者あるいは聞き手として作品世界に参入する、換言すれば、それら幾種類もの語りにより構成されているというのが、『フランケンシュタイン』の際立つ特徴なのだ (Stevick 221-39; James 77-94)。

また語りの内容にまで踏み込むと、もうひとつ独特の点に気付くだろう。それは、語りの多くが自伝もしくは伝記の様式に則ることである (McInerney 455-75)。そしてこの特徴は、作品においては、こと一個人が問題となる場合、端的には成長あるいは墮落といった時間的経緯、とりわけその人物の過去と現在との因果関係が重視されていることを物語っている。例えば先にふれたウォルトン。彼は当初詩人として名を成そうとしたがままならず、そこで幼い頃から読書を通じて抱いてきた航海への憧れを実現しようと、いそこから相続した遺産を用い探検に必要な様々な準備を経て、いま北極の地にあり、新航路開拓および地球磁気の研究に熱意を燃やしている、といったことを彼は自ら語る (7-9, 10)。そしてヴィクターとの遭遇を通じ彼はどのように変化したかという問いが、ウォルトンという個人に関する重要な問いとなる (Small 171-95; Scott 172-202; Aldrich and Isomaki 121-26)。

作品のこうした特徴をふまえるなら、その解釈の歴史において目を引くのは、ヴィクターの創造行為、ひいては彼の個性に関する解釈の多様性である。すなわちなぜ彼はモンスターを創ったのか、それから、その後の彼の振舞いはいかなる心理に基づくのかとの問いかけに対し、様々なアプローチの仕方があるということだ。代表的なところでは、エゴティズム、ジェンダー、分身、近親相姦の欲望、家族の意義あるいは権力関係、科学者としての行動原理などに注目する方法が採られてきた。² ところでそれら諸々の解釈は一点において共通している。それは、自明ではあるが、ヴィクター自身による語りのなかに手掛かりを探ることである。そこで問題にしたいのは、結果として多様な解釈を生む彼

の語りの成立ちである。その考察により、件の創造者をめぐる解釈のいわば乱立状態の原因の一端がみえてくる。またこうした分析を通じて、語る行為においての彼の身振りは、ロマン主義時代に展開された自伝という一文学ジャンルの注目すべき様相を照出するばかりか、著者 Mary Shelley が後に行ったこの作品の改訂とも無関係ではないことがわかるだろう。

II

ヴィクターの語りは、いかなる経緯を経て彼は現在の境遇に至ったかを主に扱うものであり、そこではモンスターの創造が中心としてある。つまり彼は、創造までの過程とその後の生の有様を説き明かすのだ。その意味で彼の語りもむろん自伝である。ヴィクターは己の過去を遡り、そしてそれを、語っている現在との関係性においてその重要性を評価しつつ、言語的に再構築するのだ (Johnson 2-10)。

ところで作品全体を視野に収めると、彼の語りは、しばしば見過ごされがちだが、独特の様相を帯びていることがわかる。それはそうした自伝行為が繰り返されることにほかならない。³ 明瞭な場合だけでも、全編中三度彼はそれに立ち返る。最初に行われる語りが作品の大部分を占める分量を有し、よってそれが作品の筋や主題において最も重要であるのは疑いない。具体的にはヴィクターはそこで、自分の出身地、家系、家族の紹介から始めて、ほぼ時間軸に沿い、家庭での学習の様子、母の死、大学での研究、創造、その後生じた近親者の悲劇的な死、自らの歴史を語るモンスターとの対峙、復讐心に駆られての追跡などを述べ、こうしてウォルトンに救出されるまでの半生を詳らかにするのだ (17-145)。また後にもふれるように、この主たる語りの最中にも小規模ながら何度か自伝的試みが行われている。しかし彼の自伝行為はこれに留まらず、さらに二度繰り返される。そしてこの反復において注目したいのは、それら三種各々の語りにより表象される語り手の自己像である。ヴィクターの自伝的語り全体の成立ちを把握するには、この点を分析する必要がある。

助け出されたヴィクターは、最初は躊躇いながらもウォルトンに己の過去を語り始めるが、それが上に略述した一回目の自伝行為である。ところでその語りは出出しから整然とした印象を与える。なぜそうかといえば、語り手自身何を語るべきか十分心得ているからだ。語りが本格的に開始される前の彼とウォルトンとのやりとりに、それは見て取れる。

Yesterday the stranger said to me, "You may easily perceive, Captain Walton, that I have suffered great and unparalleled misfortunes. I had determined, once, that the memory of these evils should die with me; but you have won me to alter my determination. You seek for knowledge and wisdom, as I once did; and I ardently hope that the gratification of your wishes may not be a serpent to sting you, as mine has been. I do not know that the relation of my misfortunes will be useful to you, yet, if you are inclined, listen to my

tale. (17)

つまりヴィクターは「自分の数々の不幸」を語ろうとしているのだ。しかも続けて彼が“nothing can alter my destiny: listen to my history, and you will perceive how irrevocably it is determined”

(17) と述べるように、それらの「不幸」は、「自身の運命」を決定付けたと彼が確信できるほどの重みと鮮明な輪郭をもつ事柄なのである。その手で創り上げたモンスターは、弟 William を手始めに、親友 Henry Clerval、婚約者 Elizabeth、間接的にはジュスティーンそれから彼の父までも殺害し、ヴィクターを苦難の極みへと追い遣る。極言すれば、彼の「不幸」とは、自身もその一員である家族もしくは自分に近い者たちからなる小規模な共同体を襲った悲劇でしかない (Levine 14-30; Sterrenburg 143-71; Newman 141-63)。そしてその「歴史」のこうした文字通り個人的な内容が、彼の自己像を構成していく。

作品を一読してわかるように、ヴィクターは従来二様の感情に支配されてきた。ひとつは、悲劇の根源は自分の創造行為、ひいてはそれを支えていた自身の性向にあったとする罪悪感、それから実際に多くの殺人を犯したモンスターへの復讐心である。まず罪悪感は創造の自己中心的振舞いを告発する。Cornelius Agrippa の著作に感化されるなど (21-22)、幼少時より知識欲旺盛だったヴィクターは、大学で化学に出合い、“the more fully I entered into the science, the more exclusively I pursued it for its own sake” (29) と述べるほど、それにのめりこむ。そしてその果てに人間の創造を思い立ち、いざその作業に入ると一人没頭する。そしてその際の彼の心はこのように高揚していた。

No one can conceive the variety of feelings which bore me onwards, like a hurricane, in the first enthusiasm of success. Life and death appeared to me ideal bounds, which I should first break through, and pour a torrent of light into our dark world. A new species would bless me as its creator and source; many happy and excellent natures would owe their being to me. No father could claim the gratitude of his child so completely as I should deserve their's. (32)

ここには創造者たることの自己満足が手に取るように読み取れる。その間彼は自分が神をも恐れぬ逸脱者であることには一切思いもよらない。しかしそうした過去を振り返るいま、語り手はその独善的な思い上がりにおぞましさを、道徳上の嫌悪感を隠せない。作業への熱中ゆえに故郷に残る人々への連絡を長年怠っていた彼は、父から遠回しに諫められた。これに言及してヴィクターはこう続けている。

I then thought that my father would be unjust if he ascribed my neglect to vice, or faultiness on my part; but I am now convinced that he was justified in conceiving that I

should not be altogether free from blame. A human being in perfection ought always to preserve a calm and peaceful mind, and never to allow passion or a transitory desire to disturb his tranquillity. I do not think that the pursuit of knowledge is an exception to this rule. If the study to which you apply yourself has a tendency to weaken your affections, and to destroy your taste for those simple pleasures in which no alloy can possibly mix, then that study is certainly unlawful, that is to say, not befitting the human mind. If this rule were always observed; if no man allowed any pursuit whatsoever to interfere with the tranquillity of his domestic affections, Greece had not been enslaved; (33)

彼は「家族への愛情」を蔑ろにするほどのかつての自分の性向を責め立てているのだ。⁴ そして11月のある侘しい夜、モンスターが目を開くが、“the fatal night, the end of my labours, and the beginning of my misfortunes” (42) との言葉にあるように、この瞬間こそ、彼の生涯の最大の転換点、つまり現在の悲嘆の境遇を決定付けた瞬間であった。ここで語りの最中に彼が行う小規模な自伝的試みを聞こう。

During my youthful days discontent never visited my mind; and if I was ever overcome by *ennui*, the sight of what is beautiful in nature, or the study of what is excellent and sublime in the productions of man, could always interest my heart, and communicate elasticity to my spirits. But I am a blasted tree; the bolt has entered my soul; (110)

要するに、幸福な少年時代を過ごしたが、やがて創造行為に手を染め、そしてその完了は結果的に数々の不幸を生み出し、いまはその苦境に彼は打ちのめされているというわけだ。

またこの自伝的語りにおいて、モンスター創造にまつわる彼の罪悪感、“I, the true murderer” (57) といった言回しにみられるように、自身をこそ殺人の張本人と捉える姿勢にも明瞭に表されている。ウィリアムに始まり、結婚式の晩エリザベスが殺害されるに至り、その否定的感情は膨れ上がり、それは己の過去を語る現在でも彼を苛むばかりである。

Great God! why did I not then expire! Why am I here to relate the destruction of the best hope, and the purest creature of earth. She was there, lifeless and inanimate, thrown across the bed, her head hanging down, and her pale and distorted features half covered by her hair. Every where I turn I see the same figure—her bloodless arms and relaxed form flung by the murderer on its bridal bier. Could I behold this, and live? Alas! life is obstinate, and clings closest where it is most hated. For a moment only did I lose recollection; I fainted. (135-36)

増幅する罪悪感ゆえにヴィクターは自らの死を望むほどなのだ。⁵そして物語では、続けざまの悲劇による心痛のため父も間もなく亡くなり (137)、ヴィクター自身も長期間精神錯乱を来たすのだが、その回復につれ、もうひとつの感情が彼に湧き上がる。

それは復讐心であった。

But liberty had been a useless gift to me had I not, as I awakened to reason, at the same time awakened to revenge. As the memory of past misfortunes pressed upon me, I began to reflect on their cause—the monster whom I had created, the miserable daemon whom I had sent abroad into the world for my destruction. I was possessed by a maddening rage when I thought of him, and desired and ardently prayed that I might have him within my grasp to wreak a great and signal revenge on his cursed head. (138)

そしてこの感情に駆られているがゆえに、彼は北極まで来たのだ。モンスターの追跡の様子を語る途中ヴィクターは、このように現在の心情を激発させる。

Scoffing devil! Again do I vow vengeance; again do I devote thee, miserable fiend, to torture and death. Never will I omit my search, until he or I perish; and then with what ecstasy shall I join my Elizabeth, and those who even now prepare for me the reward of my tedious toil and horrible pilgrimage. (142)

近親者を殺害したモンスターに向け、彼は復讐の誓いを新たにす。ここで以上の一回目の自伝行為が表象するヴィクター像をまとめるなら、家族や友人の死の元凶として己を責めるとともに、実際に彼らを殺めたモンスターへの復讐に燃える人物となるだろう。ただし、上の引用にも示唆されているように、それはあくまでも家族といういまは失われている共同体の一員としての像でしかないことは留意しておく必要がある。またこれに関連して、この語りにあって、モンスターもそうした狭い領域のなかに位置付けられていることは注目に値する。振り返れば、少なくともヴィクターの側からすれば、彼はその存在自体、創造主のみが知る秘密であった。死者に口なしである以上、ぎりぎりまで両者には第三者は介在しない。その創造は、“In a solitary chamber, or rather cell, at the top of the house, and separated from all the other apartments by a gallery and staircase, I kept my workshop of filthy creation” (32) と述べられていたように、人知れぬ孤独な作業であったし、また上にみたように、モンスターによる殺人はヴィクターの近親者に限られ、そしてこの下手人を最後まで隠し通すという彼の振舞いにより、その被造物はヴィクターのみに対する位置に留め置かれ続けたのだ。なおこの点、ヴィクターはエリザベスの死後初めてジュネーヴの判事に真相を告白するが、しかしその際全く信じてもらえず、そのため実質的には、ウォルトンにこうして自伝を語る段になって、

モンスターはついに人の知るところとなる。

物語では、この一回目の語りが終了した時点で、ウォルトンの語りに戻る。そこではヴィクターの話の真偽を推し量る彼(146)や、夢にのみ慰めを見出すその創造者の様子(146)などが伝えられるのだが、そうしたなかで再びヴィクターは自伝行為に赴く。なお以下に全文を引く二回目の語りに関しては、創造の前後の彼の様子に注目したい。

“When younger,” said he, “I felt as if I were destined for some great enterprise. My feelings are profound; but I possessed a coolness of judgment that fitted me for illustrious achievements. This sentiment of the worth of my nature supported me, when others would have been oppressed; for I deemed it criminal to throw away in useless grief those talents that might be useful to my fellow-creatures. When I reflected on the work I had completed, no less a one than the creation of a sensitive and rational animal, I could not rank myself with the herd of common projectors. But this feeling, which supported me in the commencement of my career, now serves only to plunge me lower in the dust. All my speculations and hopes are as nothing; and, like the archangel who aspired to omnipotence, I am chained in an eternal hell. My imagination was vivid, yet my powers of analysis and application were intense; by the union of these qualities I conceived the idea, and executed the creation of a man. Even now I cannot recollect, without passion, my reveries while the work was incomplete. I trod heaven in my thoughts, now exulting in my powers, now burning with the idea of their effects. From my infancy I was imbued with high hopes and a lofty ambition; but how am I sunk! Oh! my friend, if you had known me as I once was, you would not recognize me in this state of degradation. Despondency rarely visited my heart; a high destiny seemed to bear me on, until I fell, never, never again to rise.” (147)

一回目の自伝における自己像と比較した場合、ここにはずれが読み取れるはずである。創造後およびこれを語る現在の語り手の有様はさほど変わらない。「全能を望んだあの大天使のように、私はいま永遠の地獄に繋がれている」や、「どれほど私はいま落ちぶれているのか」といった文章、それから「墮落した状態」、「落胆」といった語句は、最初に行われた語りのなかに置かれても不自然ではない。問題は創造が完了する前の自分の様子を伝える箇所である。「自分は偉業を達成するべく運命付けられていると感じていた」、「幼い頃から私は高尚な希望と大望を抱いていた」、と彼は述べているが、先の自伝行為では創造行為が彼のきわめて自己中心的な性向に裏打ちされていたことを想起するとき、「偉業」にせよ、「高尚な」にせよ、違和感は否定できない。そしてその感がなおもって強まるのは、「自分の同朋にとり有益であるだろう能力を、無益な悲しみのうちに投げ捨ててしまうのは罪深いことだとみなしていた」と発言する彼を改めて見出すときである。この不特定多数の他者を慮る態度は、こ

こにきて初めて表明されたものである。従ってこの反復された自伝行為では、それにより表象される自己像に明らかに手が加えられているといえる。すなわちいわば広義の社会的存在としての側面が新たにそれに付与され、その点ヴィクターを家族という狭い領域に留まる人物と捉えるには困難が生じる。繰り返すが、逸脱者は逸脱者でも、彼には実は人類同胞への博愛的関心があったというのだ。そして次の三度目の自伝行為を勘案すると、ここでの語りならびにそれが表象する彼の自己像は過渡的なものであることがわかる。論を先取りすると、この反復を受け、彼の語りは最終的には最初のそれと全く異質の像を定立することになるのだ。

現在船は冰山に行く手を阻まれ身動きがとれない。それでも極地に留まることを言い張るウォルトンは、反対する乗組員らと衝突し、その際ヴィクターも彼に加勢するが、結局その主張は通らず、船は英国目指して南下することとなる(148-50)。ヴィクターが三回目の、そして最後の語りを行うのはそうした最中であり、モンスターへの復讐の機会が失せることに憤りを隠せず、一方遠くない己の死を自覚してのことであった。

“Alas! the strength I relied on is gone ; I feel that I shall soon die, and he, my enemy and persecutor, may still be in being. Think not, Walton, that in the last moments of my existence I feel that burning hatred, and ardent desire of revenge, I once expressed, but I feel myself justified in desiring the death of my adversary. During these last days I have been occupied in examining my past conduct ; nor do I find it blameable. In a fit of enthusiastic madness I created a rational creature, and was bound towards him, to assure, as far as was in my power, his happiness and well-being. This was my duty ; but there was another still paramount to that. My duties towards my fellow-creatures had greater claims to my attention, because they included a greater proportion of happiness or misery. Urged by this view, I refused, and I did right in refusing, to create a companion for the first creature. He shewed unparalleled malignity and selfishness, in evil : he destroyed my friends ; he devoted to destruction beings who possessed exquisite sensations, happiness, and wisdom ; nor do I know where this thirst for vengeance may end. Miserable himself, that he may render no other wretched, he ought to die. The task of his destruction was mine, but I have failed. When actuated by selfish and vicious motives, I asked you to undertake my unfinished work ; and I renew this request now, when I am only induced by reason and virtue. (151)

まず容易に指摘できるのは、彼自身承知しているように、ヴィクターはこの最後の語りにあって以前吐露した自分の心情を修正していることである。冒頭部分、モンスターに対する個人的な「燃えるような憎しみと復讐の強い欲求」はいまはないという。そして語り手のこの発言を支えるのは、モンスターのパートナーの創造をめぐる事柄であった。かいつまんでいうと、モンスターは自分の孤独の窮

状をヴィクターに訴え、そこから脱する手段として自身と同型の女性パートナーを創ることを彼に承諾させる(97-100)。しかし彼は、最終段階、つまりあとは生命を吹き込むだけに至って、その肉体を破壊する。重要なのは彼がそうした行動に出た理由である。パートナーが創られたからといって、二人がうまくいく保証はなく、逆にともにより邪悪になるのではとも思い巡らす(114)、決定的だったのはこうした判断であった。

Even if they were to leave Europe, and inhabit the deserts of the new world, yet one of the first results of those sympathies for which the daemon thirsted would be children, and a race of devils would be propagated upon the earth, who might make the very existence of the species of man a condition precarious and full of terror. Had I a right, for my own benefit, to inflict this curse upon everlasting generations? I had before been moved by the *sophisms* of the being I had created; I had been struck senseless by his fiendish threats: but now, for the first time, the wickedness of my promise burst upon me; I shuddered to think that future ages might curse me as their pest, whose selfishness had not hesitated to buy its own peace at the price perhaps of the existence of the whole human race. (114-15)

つまりヴィクターは、将来モンスターの種が人類を滅ぼすのではと怖れたため約束を反故にしたのだ。この自伝において語り手が聞き手に切に訴えるのはまさにその点である。すなわちモンスターの一件は、狭い個人的領域において生じた問題というより、むしろ人類という種全体に展開し得る重大かつ深刻な問題であり、従って彼の個人的な「憎しみ」や「復讐」はもはや重要ではなく、それより彼が人類全体に降りかかるであろう厄災を事前に食い止めたことに意義がある、つまりそこに自分の真価があるということだ。そして語りはまず、このパートナーの破壊、すなわち二回目の自伝行為において初めて示されたヴィクターの博愛主義的側面と直結する挿話に依拠して、彼の自己像を定式化する。「その幸福と安寧」のためモンスターにパートナーを創ることは確かに被造物への創造主の「義務」であったが、上述の理由から、「自分の同朋に対する義務」のほうが勝り、完成間近のその肉体を壊した。その点「私はそれが非難に値するとは思えない。」それから語りの後半部分がこうした彼の自己評価を念入りに仕上げていく。ヴィクターの心情および態度の変化に併せて、モンスター像も変容を遂げている。「自分の友人」を殺したモンスターについて、「復讐へのこうした渴望はどこで終わるか私にはわからない」、「彼自身不幸であり、そのため彼がさらにほかの誰かを悲惨な境遇におくことのないよう、彼は死ぬべきなのだ」との語り手の発言に見て取れるように、モンスターは、可能態として、まさに人類の敵と捉え直されているのだ。この限りにおいて彼はもはやその創造主のみに対置される存在ではない。ヴィクターの背後には自分がその側に立つ人類があり、一方モンスターの潜在能力は人類全体に対して脅威となる恐れが十分にある、従って両者の関係は決して個人的なものに留まらない。だからこそヴィクターは「自分の敵の死を欲する点で自分は正当化されると感じている」のだ。

そしてこのように自らの道義的正しさを主張する彼の語りにより浮かび上がるのは、近親者たちから構成される狭い共同体を乗り越えた、人類全体への考慮を重視する社会的存在としてのヴィクターである。より端的に言えば、二回目の自伝行為において提示された彼の新しい側面が創造の前後を問わずさらに発展を遂げたもの、つまり人類への貢献者という像にほかならない。それからこの最後の自伝行為は、その結語をもち、自己像のそうした転換をより確かなものにしようとする。そもそもヴィクターの語り全体は、彼にとっては重要な機能を有していた。それはウォルトンに対し、自分の死後、彼がモンスターへの復讐を継ぐことを説得するというものである。ヴィクターは、一回目の自伝行為の直後、その旨ウォルトンに請うた(145)。そこでこの語りにおいて再度懇願するにあたり、以前のそれは「自己中心的で邪な動機」に駆られてのものだったが、今回は「理性と美德」に促されてのものと彼は明言するのだ。要するに、モンスターを滅ぼすことは、個人的な復讐のためではなく、人類全体の幸福のためとヴィクターは示唆しているのであり、そこにこれまでとは異なる彼の姿が立ち現れるのである。強調するまでもないが、彼には独善的なところはないのだ。

かくしてこの二度にわたる反復行為を経て最終的には、個人的事情より人類全体を優先させるヴィクター像が表されることになった。すると、彼の自伝的語り全体からみて、反復行為は畢竟、改訂行為であったといえる。なぜなら、繰り返すまでもなく、各々の語りにあって表象される自己像は明らかに異なっていたからだ。そしてヴィクターの語りの成立ちを捉え直すにあたり、この差異はきわめて重要である。まず物語の展開上、この改訂は確かにヴィクターにとり必要な作業であったともいえる。先述のように、彼の語りにはウォルトンの説得という目的があった。とすれば、死が近いことを悟るに及び、自分は人類の側に立ち、モンスターは敵という明確な構図を打ち立てることは、その語りに説得力をもたせるための一方策であったに違いない。しかし注目したいのは、語り手の側のそうした意図的な事情ではなく、自己像の表象それ自体にまつわるより根源的な事情である。すなわち都合三度行われた語りのそれぞれが異なるヴィクター像を表象していたという事実、換言すれば、自伝行為の反復により自己像の改訂が行われたこと自体、語り手のアイデンティティの根源的な不確かさ、あるいはヴィクターが抱える自己の不可解性を物語るのである。自身について語ろうとするたび、その具体的様相が変わるとは、語り手のうちに表現されるべき確固たる自己像がない、もしくは明確なそれは元々存在しないことを意味すると考えられるのだ。そして興味深くも、この事情を直接受けてのように、ヴィクターはそうした自己の真実を露呈させながら生涯を閉じるのである。彼は死の直前ウォルトンに語りかける。まずもう一度彼はモンスターへの復讐を継いでくれるよう遠回しに頼み入る。

“Yet I cannot ask you to renounce your country and friends, to fulfil this task ; and now, that you are returning to England, you will have little chance of meeting with him. But the consideration of these points, and the well-balancing of what you may esteem your duties, I leave to you ; (151-52)

この背後には再び、自らを人類への貢献者とみなす彼を読み取れるのだが、続けて “Seek happiness in tranquillity, and avoid ambition, even if it be only the apparently innocent one of distinguishing yourself in science and discoveries” (152) と、つまり逸脱者にはなるなとウォルトンに警告し、さらにことを混乱させるかのように、“Yet why do I say this? I have myself been blasted in these hopes, yet another may succeed” (152) と、逸脱することの非を疑問視する言葉も発するのだが、その真意はどうあれ、この一連の発言には自分を自己中心的な者と捉えているヴィクターが透けてみえるのである。こうして彼は、自己像をめぐる矛盾を自ら露わにしながら、言い換えれば、不可解な人物のまま、世を去るのだ。そして第一章で指摘したモンスター創造の理由あるいはヴィクターの人間像に関する解釈の多様性は、以上のような語りの実態に依っていたと考えられる。要するに、結局その反復を含む彼の自伝的語りは全体として、その確固たるアイデンティティを表象し得ておらず、それが様々な解釈を誘引する土壌になっていたのだ。⁶ そこでこうした彼の語りの有様は、ロマン主義、それから著者シェリーという文脈に照らすとき、さらに意義深さを増す。

III

ロマン主義と自伝は浅からぬ関係にある。確かにその文学ジャンルはロマン主義の時代に始まったのではなく、Saint Augustine の *Confessions* (397-98) を嚆矢に、それは比較的長い歴史をもつ。ところがロマン主義が重要なのは、そこを境に自伝の様相が一変するからである。それまで自伝は著者の自己賛美、自己弁護のための手段であった。換言すれば、著者は己のあるべき姿を語りを通じ読者に理解させようとしていたのだ。しかし18世紀末になると、ねらいそのものが変化し、読者と著者の関係というより、専ら著者、とりわけその内面が注目される。すなわち過去の自分と現在の自分に焦点が結ばれ、それらのあいだに統一性を見出す、そのための手段として自伝が試みられるようになるのだ。要するに、ロマン主義に入り自伝は、自己の探究、ひいてはその定式化を目的とした文学様式として新たに登場するのである。⁷ しかし文学史が教えるところでは、そのジャンルは必ずしもそうしたねらいを果たすには及ばなかった。そしてヴィクターの自伝行為はこの実態を如実に反映すると読めるのである。

具体的な例をみよう。英国ロマン主義においての代表的な自伝記述者には、William Wordsworth と Thomas De Quincey がいる。両者はともに、各々 *The Prelude* と *Confessions of an English Opium-Eater* において、自伝行為を行う。しかし実際にはそれは上手くいかなかった。彼らは生涯これらの作品を改訂し続け、そのため確固たるかたちを有するものだけでも、三種類の『序曲』、二種類の『告白』が残された。そしてこうした改訂の歴史が物語るのは、強調するまでもなく、自己の不可解さにほかならない。己のアイデンティティが根源的に不確かであったからこそ、彼らは繰り返し自伝行為を試みた、いやそうせざるを得なかったのだ (Arac 57-70; Porter 591-609; O'Neill 13-20)。とするならば、ヴィクターによる言語的行為はまさしく、ロマン主義における自伝の実情、いわばそ

の呪わしき部分を体現していたといえる。つまり自伝行為は主体にとり自己把握の契機などではなく、逆説的にもそれは自己にまつわる深刻な謎を浮彫りにする行為でしかないという事実、一言でいえば、近代的自伝様式の欺瞞を、彼の振舞いは具現していたのだ。

それから自伝をめぐるこうした同時代の状況をふまえ、ヴィクターの自伝行為と作品の著者とを照らし合わせるなら、そこに別の興味深い事柄がみえてくる。シェリーは後に『フランケンシュタイン』に手を入れ、1831年に改訂版が出版される。そして彼女が行った改訂には、主に文体や言葉遣いに関して手直しをしたとの彼女自身による言及にもかかわらず (173)、実際には、エリザベスの出自およびクレルヴァルの人物像の変更、家族ならびに自然界に関する異なる捉え方の提示などに加え、ヴィクター像の大幅な修正が含まれていた。端的なところで、彼女は彼の行為の根拠を基本的に運命に帰した。行動原理が極端に外在化されることで、ヴィクターは人知の及ばぬ力の操り人形と化したのだ (Rieger xxi-xxiii; Mellor, "Choosing" 31-37)。誤解を恐れずにいえば、こうした改訂は、とりわけ主人公の創造行為をそれが当初孕んでいたいわば哲学的な複雑さを解消することで平板化し、作品そのものを単純化する。そして自伝的語り手ヴィクターにあってはさらにこの改訂は、彼自身による自己表象、自己把握の試みの意義を収奪し、彼の言語的行為はせいぜいウォルトンの説得というねらいに根差すものでしかなくなる。というのも、先述のように、所詮すべては運命のなせるわざと捉えることは、人間のあらゆる行為からその主体独自の内面性を削除するに等しいからだ。こうした改訂に関して、シェリーは、近代的自己が本来的に不可解であるため (Hartman 46-56; McFarland; Brown 275-301)、あえて運命という古めかしい解決策を導入することで、作品からそうした根深い困難を除去しようとしたとも読める。あるいは彼女自身に、彼女をしてそのような自己を封印させる何らかの現実的、心理的理由があったのかもしれない。さらには、多くの自伝的小説やいくつもの伝記をその手で生み出した経歴を勘案するとき (Williams 95-99)、自伝行為は決して確たる自己を表象し得ないと気付いた彼女は、それを無意味な試みと断ずるべく、そうした書き換えを行ったとの推測も不可能ではないだろう。しかしいずれにせよ、逆説的にもこの改訂により、1818年版『フランケンシュタイン』が表象していた不確かなヴィクター像は後世残存し続けるという運命が定められたことになる。いうなればシェリーはヴィクターの謎を解く鍵を永遠に持ち去ったのだ。こうして彼の実相をめぐる解釈の歴史が始まったのであり、そしてそれは今日でも続いている。

注

- 1 作品にはさらに、ウォルトンが航海にあたり雇い入れた "the master" の経歴についての語り (10-11) や、ヴィクターの父母の過去についての語り (18-19) などがある。
- 2 以下各々の方法の主な例を挙げる。エゴティズムについては、Tannenbaum 101-13、Cantor 103-32、Poovey 122-33、ジェンダーについては、Homans 100-19、Veeder 81-102、Smith, "Cooped up" 270-85、Hobbs 152-69、分身については、Bloom 118-29、Miyoshi 79-89、Thornburg 6-11, 63-120、Spark 161-67、Collings 245-58、近親相姦の欲望については、Kaplan and Kloss 119-45、Hill 335-58、Gilbert and Gubar 213-47、Vlasopolos 125-36、

- 家族の意義あるいは権力関係については、Ellis 123-42、Mellor, *Mary Shelley* 38-51, 70-88, 115-26、Crisman 27-41、Bennett 1-17、科学者としての行動原理については、Cude 212-25、Botting 164-86、Smith, "Frankenstein" 39-59、Rauch 227-53、などを参照。なお実際の解釈では、これらの視点は単独で用いられるというより、いくつかを組み合わせる用いられる場合が多い。
- 3 なお以下本文で取り上げる自伝行為のほかに、つまりウォルトンに対してそれを行う以前にも、ヴィクターは自身の過去を振り返っている。例えば、クレルヴァル殺害の濡れ衣を着せられたアイルランドを離れ、故郷ジュネーヴへ向う船上で彼は創造までの経緯を回顧する (127)。また家族を殺害したモンスターに復讐するための援助を求めて、彼はジュネーヴの判事に自分がこれまでなしてきたことを語っていた (138)。
- 4 自分の例を引合いに出し逸脱行為を戒めるヴィクターの姿はほかにも見出せる。31参照。
- 5 なお語りのなかの主人公ヴィクターは、自分こそ真の殺人犯であるという意識に度々苦しめられていた。例えば、52, 122, 127, 128, 129参照。
- 6 なお本文では議論していないが、モンスターが伝えるヴィクター像も彼の不可解さを強めるのに寄与していたのは確かであろう。端的なところで、"You are my creator, but I am your master" (116) とのモンスターの発言は、双方のあいだのとりわけ力関係を揺さぶり、そのためヴィクターの自己把握にも影響を及ぼさざるを得ない。またモンスターがヴィクターとの対話の際しばしば持ち出す責任論もしくは正義論も同様に、ヴィクターの行為の、ひいては彼自身の倫理性を揺るがす。この点は、65-67, 94, 97-100などを参照。
- 7 以上の自伝に関する議論については、Pascal 21-60, 179-95、Weintraub 18-48, 115-65, 294-376、Spengemann 62-165、Sturrock 49-81, 132-62参照。

引用文献

- Aldrich, Marcia, and Richard Isomaki. "The Woman Writer as Frankenstein." Behrendt, *Approaches* 121-26.
- Arac, Jonathan. *Critical Genealogies: Historical Situations for Postmodern Literary Studies*. 1987. New York: Columbia UP, 1989.
- Bann, Stephen, ed. *Frankenstein, Creation and Monstrosity*. Critical Views. London: Reaktion, 1994.
- Behrendt, Stephen C., ed. *Approaches to Teaching Shelley's Frankenstein*. 1990. Approaches to Teaching World Literature. New York: Modern Language Association, 2001.
- . "Language and Style in *Frankenstein*." Behrendt, *Approaches* 78-84.
- Bennett, Betty T. "'Not this Time, Victor': Mary Shelley's Reversioning of Elizabeth, from *Frankenstein* to *Falkner*." *Mary Shelley in her Times*. Eds. Betty T. Bennett and Stuart Curran. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2000. 1-17.
- Bloom, Harold. "*Frankenstein, or the Modern Prometheus*." *The Ringers in the Tower: Studies in Romantic Tradition*. 1971. Chicago: The U of Chicago P, 1973. 118-29. Rpt. of "*Frankenstein: Or, the New Prometheus*." *Partisan Review* 32 (1965): 611-18.
- Botting, Fred. *Making Monstrous: Frankenstein, Criticism, Theory*. Manchester: Manchester UP, 1991.
- Brown, Marshall. "A Philosophical View of the Gothic Novel." *Studies in Romanticism* 26 (1987): 275-301.
- Cantor, Paul A. *Creature and Creator: Myth-Making and English Romanticism*. 1984. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Collings, David. "The Monster and the Imaginary Mother: A Lacanian Reading of *Frankenstein*." Smith, *Mary Shelley* 245-58.
- Crisman, William. "'Now Misery Has Come Home': Sibling Rivalry in Mary Shelley's *Frankenstein*." *Studies in Romanticism* 36 (1997): 27-41.

- Cude, Wilfred. "Mary Shelley's Modern Prometheus: A Study in the Ethics of Scientific Creativity." *The Dalhousie Review* 52 (1972): 212-25.
- Ellis, Kate. "Monsters in the Garden: Mary Shelley and the Bourgeois Family." Levine and Knoepfelmacher 123-42.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Hartman, Geoffrey H. "Romanticism and 'Anti-Self-Consciousness.'" *Romanticism and Consciousness: Essays in Criticism*. Ed. Harold Bloom. New York: Norton, 1970. 46-56.
- Hill, J. M. "Frankenstein and the Physiognomy of Desire." *American Imago* 32 (1975): 335-58.
- Hobbs, Colleen. "Reading the Symptoms: An Exploration of Repression and Hysteria in Mary Shelley's *Frankenstein*." *Studies in the Novel* 25 (1993): 152-69.
- Homans, Margaret. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women's Writing*. 1986. Women in Culture and Society. Chicago: The U of Chicago P, 1989.
- James, Louis. "Frankenstein's Monster in Two Traditions." Bann 77-94.
- Johnson, Barbara. "My Monster/My Self." *Diacritics* 12 (1982): 2-10.
- Kaplan, Morton, and Robert Kloss. *The Unspoken Motive: A Guide to Psychoanalytic Literary Criticism*. New York: Free Press, 1973.
- Levine, George. "Frankenstein and the Tradition of Realism." *Novel* 7 (1973): 14-30.
- Levine, George, and U. C. Knoepfelmacher, eds. *The Endurance of Frankenstein: Essays on Mary Shelley's Novel*. 1979. Berkeley: U of California P, 1982.
- McFarland, Thomas. *Romanticism and the Forms of Ruin: Wordsworth, Coleridge, and Modalities of Fragmentation*. Princeton: Princeton UP, 1981.
- McInerney, Peter. "Frankenstein and the Godlike Science of Letters." *Genre* 13 (1980): 455-75.
- Mellor, Anne K. "Choosing a Text of *Frankenstein* to Teach." Behrendt, *Approaches* 31-37.
- . *Mary Shelley: Her Life, her Fiction, her Monsters*. New York: Routledge, 1988.
- Miyoshi, Masao. *The Divided Self: A Perspective on the Literature of the Victorians*. New York: New York UP, 1969.
- Newman, Beth. "Narratives of Seduction and the Seductions of Narrative: The Frame Structure of *Frankenstein*." *ELH* 53 (1986): 141-63.
- O'Neill, Michael. "'Wholly Incommunicable by Words': Romantic Expressions of the Inexpressible." *The Wordsworth Circle* 31 (2000): 13-20.
- Pascal, Roy. *Design and Truth in Autobiography*. 1960. History and Historiography. New York: Garland, 1985.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Women in Culture and Society. 1984. Chicago: The U of Chicago P, 1985.
- Porter, Roger S. "The Demon Past: De Quincey and the Autobiographer's Dilemma." *Studies in English Literature 1800-1900* 20 (1980): 591-609.
- Rauch, Alan. "The Monstrous Body of Knowledge in Mary Shelley's *Frankenstein*." *Studies in Romanticism* 34 (1995): 227-53.
- Rieger, James. "Mary Shelley's Life and the Composition of 'Frankenstein.'" Introduction. *Frankenstein or the Modern Prometheus*. By Mary Wollstonecraft Shelley. Chicago: The U of Chicago P, 1982. xi-xxxvii.

- Scott, Peter Dale. "Vital Artifice: Mary, Percy, and the Psychopolitical Integrity of *Frankenstein*." Levine and Knoepfmacher 172-202.
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. Ed. J. Paul Hunter. New York: Norton, 1996.
- Small, Christopher. *Mary Shelley's Frankenstein: Tracing the Myth*. Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 1973. Rpt. of *Ariel Like a Harpy: Shelley, Mary and Frankenstein*. 1972.
- Smith, Crosbie. "Frankenstein and Natural Magic." Bann 39-59.
- Smith, Johanna M. "'Cooped up': Feminine Domesticity in *Frankenstein*." Smith, *Mary Shelley* 270-85.
- , ed. *Mary Shelley: Frankenstein. Case Studies in Contemporary Criticism*. Boston: Bedford Books, 1992.
- Spark, Muriel. *Mary Shelley*. London: Constable, 1988.
- Spengemann, William C. *The Forms of Autobiography: Episodes in the History of a Literary Genre*. New Haven: Yale UP, 1980.
- Sterrenburg, Lee. "Mary Shelley's Monster: Politics and Psyche in *Frankenstein*." Levine and Knoepfmacher 143-71.
- Stevick, Philip. "*Frankenstein* and Comedy." Levine and Knoepfmacher 221-39.
- Sturrock, John. *The Language of Autobiography: Studies in the First Person Singular*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Tannenbaum, Leslie. "From Filthy Type to Truth: Miltonic Myth in *Frankenstein*." *Keats-Shelley Journal* 26 (1977): 101-13.
- Thornburg, Mary K. Patterson. *The Monster in the Mirror: Gender and the Sentimental/Gothic Myth in Frankenstein*. Studies in Speculative Fiction 14. Ann Arbor: UMI Research P, 1987.
- Veeder, William. *Mary Shelley and Frankenstein: The Fate of Androgyny*. Chicago: The U of Chicago P, 1986.
- Vlasopolos, Anca. "*Frankenstein's* Hidden Skeleton: The Psycho-Politics of Oppression." *Science-Fiction Studies* 10 (1983): 125-36.
- Weintraub, Karl Joachim. *The Value of the Individual: Self and Circumstance in Autobiography*. 1978. Chicago: The U of Chicago P, 1982.
- Williams, John. *Mary Shelley: A Literary Life*. Literary Lives. Houndmills: Macmillan, 2000.